

---

# 悪魔な男の子と愉快的仲間たち

トリニティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔な男の子と愉快的仲間たち

### 【Nコード】

N8758K

### 【作者名】

トリニティ

### 【あらすじ】

悪魔が天使に天使？が悪魔に？ちなみに「ような」人たちですよ人間ですよ。

自称普通の高校生とその幼なじみ、そして愉快的仲間たちのコメディーで最強なお話。

**悪魔な男の子と愉快的仲間たち（前書き）**

初投稿です。ちよくムズい

## 悪魔な男の子と愉快な仲間たち

この世に神だの何だの  
そんな奴らはいない。

いないが、

悪魔の「ような」奴は居る  
認めたくないが

確実に一人、今の目の前に

.....「すみませんでしたあゝ」

ハイハイ始めましたよ  
いきなり土下座で始める小説ってどうよ？

自分の名前は神木 太陽。  
自称普通の高校生さっ！

何故こんな夜道でDOG EZA ?

原因は目の前コイツ…

「ウフフフツ、 死ね…」

悪魔の「よつな」奴

名前を如月 神奈です。 あだ名を「アルテミス」

コイツのコイツたる由縁、

それは世界最強の八方美人にあるのだ。

>登校中<

「キヤー 見て如月さんよ」

「朝から 我らがアルテミスに会えるなんて…」

「如月先輩！ こっち見てくださーい」

「こころでアイツが

「みなさん しし機嫌よじ。」

>現実<

「おやゝ道の真ん中に人の形をしたドロ人形が、」

誰がドロだ誰が！

せめてボロ人形だろ！

「ふむふむ 3時間振りに会っていきなり土下座なんて、私の知る限り一人だけ。」

何がいきなりだ、テメエが見えた瞬間オリンピック並のスピードで突っ込んできたんだろが！

「ハアゝ 悲しいわ… 唯一の幼なじみが「いきなり」土下座なんて」

だからいきなりはテメエでしょーが、それでいくと俺が自主的にしたみたいじゃん！

「おや、 違うのかい？」

違うだろーが、イヤ待て今心の声にはんの「したよ」「おいーエ  
スパーマさかのエスパーで「違う」……………ほんとお？

「本当だ……………4割位」

バカな、幼なじみが4割エスパーだと、なら残りの6割はどこに…  
ハッ 俺か俺なのか俺なんですな。ならばっ

「今っ 俺に眠る力が目覚め「夜中に迷惑たるが！」  
グフェっ……………起き」「ハイ起きた起きました！」

コイツは何故だか俺にだけ本心を剥き出しにする。

なぜに俺？ ハッ！まさかつンデ「殺すぞ」ゴメンナサイゴメ  
ンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ。

「ねえ あれ何かな？」

「何ってな「パリーーン」

辺り一帯にガラスの割れたような音が響いた、とっさに鞆を投げ捨て神奈を護るように身を丸めた。

冷たい静寂の中で声が聞こえた

「 ゴメンナサイ 」



**悪魔な男の子と愉快な仲間たち（後書き）**

更新は最低1ヶ月以内で頑張ります（、、ド

第1話！ ダメな展開とテンプレ乙々（前書き）

テンプレ乙々！いろいろいきなりです。

## 第1話！ ダメな展開とテンプレ乙

異世界キターヽ( )ノ

誰がどこでここはなに？ハア

マズいぞ一人でハアハアしてると危ない人みたいだな、落ち着け俺、  
be cool be cool

いろいろ整頓しよう

まず異世界、決定事項、よし次、

えっ理由：作しyo「ヤメロー」チッ 大人の事情だ。

次 何故いるか：不明

どうしてこうなったか、分かったらくろっしねえよ。

そして何より……「ふるふるふる」「ガサ」みゃっ「

何コレ ちょくかわいいぞ、めっちゃしがみついているふるふる震えてるし……だがしかし、…これは嘘だ嘘だうそだウソだ

何故悪魔（仮）が震えて腕にしがみついている？

新しい呪いですか（悲）

ハッ 分かったぞ、油断させて腕をへし折るつもりだな！ふっ  
ふっふ甘いぜ

さりげなく歩幅は大きくペースを上げて離れる。どうだコノヤロー  
すると

「ひよわ チョ待って置いていかないで」「ガッツ」にゆあつ

ドン！  
（オツゝ背中に柔らかな感触が！）

「うわー置いていかないでってばー、太陽のイヂワル」

（グハアツ？ 涙目で上目遣いだと、俺の鋼の理性がっつ 悪友  
に理性の 核シエルターと呼ばれたこの俺がっ 凄まじい破壊力、  
こんなのギヤルゲーだけだと思ってたぜ）

しかしコイツ大丈夫かっ？マジで頭打ったとか悪霊が乗り移ったと  
か、いつもの悪魔が天使っつーか小動物みたいに可愛いですけど

「そんなっ、かっ可愛いなんて！」

赤くなるなーっ！コノヤロー

だがこれで間違いない、心の声に反反応なんてヤツしかできん。

問題は何故こうなっか、これからどうするか、どうすれば戻るのか、の3つだな 神奈にしてもこの異世界にしても、

「グ~~~~」

まずは飯の確保ですか

おっ…良いところで生物の気配が…猪かな

えっ何故気配が読めるって？ふっふっふそれは気配が読めないと死んじゃうからさ。 まあその内番外編すんじゃね。

「うーむ…」

「ねえ太陽… これって食べられるのかな？」

仕留めた猪は落とし穴に頭から突っ込みながら内臓破裂で死んでる…モンハンみてーだな

「どつだろつね」

あれっまた変な気配が、これは人が一人これと同じが2匹だな、やっぱり助けなきゃダメかな…。

「ええっ？どつどつするの？こつこついう時は、えっと…へそと親指を隠してお茶を沸かして爪を切って、あつても夜に爪を切るのはよくないって、わわわどしよ」

「落ち着け神奈、へそを隠すのは雷様だ、親指を隠すのは墓を通るときだ、それに今は夜じゃないぞ、そしてお茶を沸かしても全く意味が分からないぞ」

神奈のポケラツシユに冷静に対処する俺：なんかツツコミ慣れてしまった事が虚しいぞ

「うっうん 分かったよ」

落ち着く為に深呼吸してどんだけ焦ってたよ。

「まず俺が見てくるよ……っっていうか向こつから近ずいてきてる？」

今いる場所は森の中で開けた平野だ。

それよりこの速度で移動って猪はともかく人間の方はめっちゃくちゃはやいな。

気配のするを向くと土煙やら木の倒れる音がする。

見えてきたな〜って子供か？遠目でみて体が小さいな、女の子かな…

俺は一步目を強く踏み出し瞬地と呼ばれた歩法で距離を詰める。

猪は子供の後を追う形で並列走行している。

木を蹴り右の猪のこめかみ？辺りを蹴り飛ばした。

猪は左の猪を巻き添えに吹っ飛んだ、右の猪は気絶もしくは死亡左の猪は目パチパチしている。

そこに一気に駆け寄り気の通った拳を土手っ腹に叩き込んだ。

猪はその場で倒れ絶命した

林から神奈を呼んで子供に駆け寄る、すると子供はフードを取り礼言った

「ありがとうございます」と笑顔で言った、この子は女の子で顔はかなり可愛いさらにさっきの笑顔は男なら惚れるほど美しかった、がしかし

2人の視線は顔の少し上を行っている、疑問に思った彼女は2人に

問い掛ける

「あの〜どうかしました？」  
すると2人は揃って声を出す

「「ネコミミってどうなの？」」

視線の先彼女の頭の上には2つの、ソレ＝ファンタジイ  
と言っても過言ではない可愛らしい黒ネコミミがあった。



第1話！ ダメな展開とテンプレエエ（後書き）

敢えて言おうネコミミ好きであるとう！

こついつ時は流れに身を任せるべし!。(前書き)

神ばっかだけど後で悪魔もちゃんと出すからね!

「いついづ時は流れに身を任せるべし!」

さあ〜どうするっ?どうするよ?

今の状況

俺とついに頭のおかしくなった幼なじみ(仮定)とさっきのネコミミガール、名をルカと言うらしい

悪い奴じゃないっばいから今まで経緯を話し合った。

「悪い、今言った事もう一回言っつて?」

「ですから転移魔法を練習してたら森に飛ばされて、後ろに猪がいて、本気ダッシュで逃げてたらアナタがいて……………聞いてますか?」

「きっ……………」

「きっ?どうかされまっ」キタ……………」なっ……………何がですか?……………」

ヤバイヤバイよヤバイですよ

ついに魔法が来ましたよ。氣が使える時点で普通じゃ無いのにさら

に人と俺の距離が

「どうしたんですか？大丈夫ですか？」

「いや…また一つ皆さんと違う生き物に進化しそうでね、ハハッ…  
鬱だ。」

「どうしてですか？皆さんと違うのは罪なのですか？それに進化っ  
てかっこいいし。」

…………前半良いこと言ったのに、後半イラナイヨ

…でもそうだよな、皆と違う、普通じゃ無いからってどおってこと  
無いよな、それに…本から普通じゃ無いし。

「あぁっ ありがとう、で話を戻すとして、まずここってドコ？」

「ドコって…アルマン国立特殊生徒育成専門学園第4支部ですけど。  
」

漢字が多いのは愛嬌ですよ

「そういえば、アナタ達はどこの生徒ですか？てゆうかどうしてこ



「電波…って何ですかソレ？」

「大丈夫大丈夫こっちの話だから、隠しても仕方ないからさっきまで経緯を話すよ」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「なるほど…そんな事が…あったんですか。」

話した自分がいうのも何だが、この子も大丈夫か…助けたとはいえ会ったばかりの奴のアホな話を信じるってどうなのよ。

「では、これからどうなさるのですか？行く当ても無いのでしょうか？」

ハア〜そうだったぜコノヤロー　てゆうかなんか俺めっちゃ冷静  
じゃね、異世界なんてアホな話で頭の思考力がダメになったかな。

「もしよければ、学園に行きますか？学園に行けば情報も在るかも  
しれないし、ご飯や寝床もあるし、それにもしかしたら学園に入学  
出来るかもしれないですよ。」

「ホントオ？私魔法って一度使ってみたかったんだあ」

使ってみたかったんだあ  
じゃねえよアンポンタン、まっ今んとこそレが一番だしな

「ああ　お願いするよ　ルカ」ニコッ

「ズキユーーーーーン」

一気に顔を赤くする乙女2人

全くこれっぽっち所か毛先ほどにも分かっていない男一人。

作「これが主人公の初級ステータス、鈍感とハーレム体質！」

羨ましくなんかないやい!!

チクシヨーム、イケメン全員死んじゃえ　ウワーン（泣）」

あゝ…なんかまた変な電波が、うん？2人とも顔が赤いな…風邪…ではないよな、どうしたんだ？

「2人ともどうしたんだ？」

「ふえっ　どっどっもしてないよ…」

「そっそうです、どうもこうもないですよ…」

顔はバツと上げたと思いきや、今度はさっきより顔を赤らめ、声と



一緒に身体も縮め始め、最後の方は聞き取れない。

「まあいいや ルカ、学園はどこち。」

「はっはい こっちです……………多分」

今不吉な言葉が…イヤイヤ聞いてない聴いてない訊いてない

1時間後〜

「はあ〜まだなの〜」

「もっもっ少しです……………多分

訊いてない聞いてない聴いてない訊いてない聞いてない聴いてない  
訊いてない聞いてない聴いてない訊いてない聞いてない聴いてない  
訊いてない聞いてない聴いてない

3時間後〜

「ま〜だあ〜でえ〜す〜か〜？                   ハアハア。」

「ごめんなさい、もう少し後ちよつとです」

「聞いてない聴いてない訊い……………                   ル〜プ」

7時間後〜

「……………無  
理」

「ホントに後ちよつとなんでs「ダアアアアアア！」「キャアツどう  
したんd「シヤア〜ルア〜ツプ！！」「ハツハイ」

も〜無理、絶対無理神奈死んでるし、現実逃避を7時間しても誰も  
ツッコミ入れないし。

「テメエら、ここ動くなよ、いいな、もし動いたら……」「……うっ動いたら?」……今まで生きてきたことを……いや、生まれてきた事を後悔どころか、ケガと血と涙で顔が判別出来ないぐらいにボコにしてや」「すみませんでしたあゝ」

ふむふむ 土下座は異世界でも共通なのか、愉快愉快、

…俺ってこんなだっけ? 2人が地に頭つけて誤っているの見てるとなんか黒いモノがこうグツグツと……ハッ、俺は普通だ、体はどうあれ中身は普通だ。2人を見て苛めたいとか考えてないぞ ホントだぞ。

「とにかくだ 動くなよ。」

一人で行動したのは2人が邪魔なのもあるが、一番の理由はこの化け物じみた気配。

二つだけ気配で分かる事がある。

一つは確実に人間ではない事、もし一つは敵意が無いこと、敵意があるなら襲ってくるし、そんな人間じゃない奴に俺が会いに行く訳ないだろ

俺の好きな教訓は、

「キレイに死ぬくらいなら汚く生き抜く」

だけ、死ぬ可能性があるなら絶対行かないし。

ナンダコリヤ？

何コレ？家？西洋風の一軒家？なぜにこんな所に？

ガチャッ

誰かでてきたな

「フンフンフン ハハンハハ〜ン」

…スゴいのが出て来たぞ、

視た感じ明らかに男、いや漢だ…

ゴツイ デカイ クサいの三拍s「ちよつと待ちなさいよ〜クサい  
つてなによ〜」コイツをオカマさんですか？

「失礼しちゃうわ もう

私は神様つてやつよ！」

ついに自称神様（仮）まで出たよ〜、ジャンルに入って無いじゃん  
とか言わない!。

「ハイハイ 神様神様（棒読み）」

「まあ 何でも良いけどね、アナタがここに来た訳を教えましs y  
「セ〜イ ドス」キャアツ…いきなりか弱い女に何すんの！」

「うつせえ！ テメエがなにかしたのくらい分かり切ってるじゃボ

ケ！、後世界中探しても鳩尾に蹴り食らって「キヤアツ」ですむ女をか弱いと言わねー、つーか女じゃねえだろが！」

「体は男でも心はおん」次くだんねえこと言ったらお前を土に還す！」……オホン！ ジョークはここまで」

「あなたはこの世界に呼ばれたのよ、神に成るために」

バカ発言来ました

俺が神に成るってさ？この人（？）、大体成るって？

「文字通り（成る）の、例えるなら将棋ね、将棋は相手の陣地に進むと成る、つまり元の世界が自分の陣地、ここが相手の陣地ってわけよ…あっ大丈夫よ相手の陣地って言うのは例えだから世界同士で戦争なんてしないから。」

それが、それがもし本当なら

「つまり俺は成った時に神様になる資質が在った  
そして世界に選ばれたからここにいます？」

「そう、あなたは神に成ることの出来る器を持つ人間、この世界があなたを神に選んだ、と言っても候補者だけどね」

候補者？

「仮にそれが本当だとして、候補者という事は他にも居るのか？」

「あなたは本当に賢く強いわね、この状況で他人の心配なんて……  
候補者は六人、あなたと同じ普通ではない子達、

神の心 神の体 神の脳、神に成れる要素は六人それぞれよ、  
そして六人全員が神に成れる事決定してる」

なら何故？

「裏はなんだ……」

「隠すつもりはないわ…… ただ六人の一番を決めなきゃいけない、  
あなた達自身でね」

「それは殺し合えってことか……」

「それは早とちりよ、そうなると得意不得意が出来てしまう、それは納得出来ないでしょう、だからこそ六人全員で決めるの、絶対的に公平に。」

リーーーーー

辺りに音が鳴り響く、

「そろそろ時間ね、簡潔に行くわ　六人が公平に成れるように取り締まるモノを　管理者が私を入れて3人居るわ、この事を教えるのもあたし達の仕事の一つ、あたしはアナタと後一人の担当よ」

「……………」

「アナタが考えていることは合っているわよ…アナタと一緒にここにきたあの女の子は、候補者の一人、神の人格を持つ娘」

そうか…………



「六人が集まる場所は学び舎  
六人全員自然に集まるわ  
コレで終わりね、私は帰るわね」

「待て、最後に二つ聞きたい」

「あらっ？ 何かしら〜彼氏は居ないわよ〜」

「どうでもいいわ！学園ってどっちだよ、コノヤロー」

「それは大丈夫      あの子がちゃんと思いつからね」

「じゃ最後だな、お前の 主人は誰だよ。」

「……うふふっ      アナタは本当に賢いわね、大丈夫六人が一番を決める方法がきまればあの人はずっと出てくるわ。」

「じゃあいいや 早く帰れよ」

「それでは、お別れのキスを、今すぐ帰るか土に還るかどっちがいい?」

「……あゝ急用を思い出したわ またね」Chu!

アイツ帰る時投げキッスしやがったぞ、候補者殺すつもりか?

「これからどうする?.....知らないっ!!(前書き)

自分で読み直したら、恥ずかしい〜) (

「これからどうする?.....知くらないっ!!」

「でっか〜」..... あう〜首がイタイよ〜」

「フフツ、この門は学園の中でもかなり有名ですからね、数キロ先からでも見えるって言われてます、更に門自体に魔法でマーキングされていて転移魔法でいつでも戻れるんですよ」

今日の前にハガ○ンの真○の門なんか比べられない位デカイ門が.....  
ってちよつと待てよ!!!

「なあルカ?、マーキングされてるなら転移魔法で帰ればよかつたんじゃないのか?」

「アハハツ、お恥ずかしながら実は私、その転移魔法が「出来ないのか?」ウグツ.....出来ない訳ではないですよっ!.....ただ行き先とかいろいろ不安定と言いますか、定まらないことが「どうなんだ?」..... ええそうですよ!!!出来ませんが何か?」

おいおい逆ギレですか?..  
ちよつと苛め過ぎたかな〜。

「ふ〜ん ルカって魔法ヘタクソなんだ〜。」

「なっ!ちよつ違いますよ失礼な!、ただ転移魔法が出来ないだけで他はスゴいですよ、ホントですよ、簡単な家庭魔法から古代殲滅

魔法まで何でも「でも転移魔法出来ないんだろ？」ウツ……グスン」  
あるえ〜？ヤバくない？、もしかしてもしかしたらイヤイヤもし  
かしなくても……泣かせた？

「そんなにつ……グスツ……責めなく……エグツ……たっ……  
て……良いじゃ……スン……ない……ですか」

ウオオオオオアアア！やってしまった……  
どうする、土下座？腹切り？ダメだっ……女の子を、こんなに可愛く  
てか弱い女の子を泣かしたんだ俺如きの命では足りない……

「ウグツ……スンツ……ヒグツ」

……これしかないかな？

……ギユツ

ビクッ

抱きしめると同時にルカの体が跳ね上がった。

「ゴメンな……ルカ……」  
ギユウウウ……

謝りながら強く優しく抱きしめる事、喧嘩した恋人のように、それ

でいて子供をあやす親のように。

それが自分に出来る精一杯の謝罪、が、しかしこの良いような悪いよくなワケの分からない状況で面白く無さそうな顔が一つ。

「ジトーーーー（。。。）」

「なっ何だよ、このいい空気でそんな目するなよ…」

「へえ」 一方的に女の子を苛めて泣かせておいて、バツが悪くなつたらいきなり抱きしめるってどうなのかなって思っただけ」

ウグツ…しつ仕方がないだろ！なんかこうしたほうがいい気がして、だがしかし、泣かせて抱きしめたが（いきなりで無理矢理）それでも反省も後悔もしていない！（最低だ！イケメン死ね！）

さつきからウルサイぞ teme 電波出すヒマあつたら文才磨いて出直せダメ作者！

作（ヒドい、ヒド過ぎるこんな扱いはあんまりだ）

事実面白くないか「あの…」ら別に良いじゃん。

（そんなんっ、一生懸命書いてるでしょうGA！）

書くだけ「ええっと…」ならそこらのハムスターにだって出来るわ

！「神木さくん」（できねえよ！何ソレ？俺がハムスター以下だと？そのハムスターIQいくつだっ？）「180以上」（Gフォー〇ですか？ハムスターがスパイ何ですか？「いい加減に、ル力を…」あゝもう一回観に行きたいなあゝ、イヤ次はアリスインワンダーラ  
「離しなさいっ！！」  
グギャアアアアアアアア

「誠に申し訳ないです」

「いついえっ！そんな、転移魔法が使え無いのは事実だし、ちゃんと謝ってくれましたし、それに…ギョツとして…くれましたし…」  
カアアアアア

…何この子、めがっさ可愛いもう一回抱きしめたい、お持ち帰りしたい…あっここ異世界だった…忘れてた。

「見つめ合うな、素直になるな、おしゃべりするな。」  
TUNAMI?サザン?オールスターですか？

「何だよ…何でそんなに不k「判らないからから彼女居ない歴〓年齢なんだよっバカ！」ナゝニゝ、テメエだって同じじゃねえか！」

「あたしはいいのっ!!」

「意味解んないし、アレか、アレですか、嫁の貰い手くらいいつでも見付かるってか」

「違うもん、太陽のバカ!」

ハア〜? 謎だ、世界七不思議が一つふえたな。

「わたしだって!...わたしだって...いきなり異世界なんて...怖いのに...太陽は女の子とイチャついて...わたしは...」

.....このノリと空気は.....

アンコール? まさかのアンコールですか? 大体神の人格だかなんだかしらんがまるで知らんような奴抱きしめるって、たしかに顔はアイツだが性格がぜんぜん違う、あの悪魔に比べたらコイツは天使イヤ神の人格とも呼べるが、しかし、いや、でも。

「コリヤ、お主男じゃろが! 女が不安がっていたら優しく安心させるのが男じゃろっ!、早よう安心させてやれ」

...そ〜う〜い〜え〜ば〜このタイミングで紹介しなければならぬメンドイ奴がいて、この「誰やねん!？」「的な声の出所は目線地表スレスレに居る羽根の生えたネコ。



あの筋肉オカマダルマと同じ「管理者」で神奈の担当者ならぬ担当  
ネコ

「ホレホレ 早く抱きしめて愛を囁かんか、それともデーパーキ  
スか、まさかこんな朝方から……お主…若いとはいえ…それは…」

待て待て待てよ！！なんだよ、コイツはネコだから判らんが多分ニ  
コニコしてるぞ！絶対満面の笑みだぞ。

分かったよ分かりましたよ！

「フンフーン！ エヘヘ」

まさかのアンコールから数分、門をくぐり、歩いている、アイツは前をスキップしてる、なんか急に機嫌良くなつたな、ルカは右、神奈を止めないって事は道は合ってるのかな？、ルカは目を合わせてくれない…キラワレタ……後でもつかい謝ろう、ネコは神奈の担当ネコじゃなかったか？何故に俺の肩に？聞いても「お主の肩は居心地が良い」しか言わないし、まあ軽いしいいか。

「あぁっ校舎ですよ！」

「えっどこどこ？」

「案外普通だな魔法学園」

「アレ？なんか窓から出て来たよ、空飛んでるよ」

おいおいおい魔女は筈だろ？それ以外一切認めんぞ俺は、男？知らナイー！！

「あぁっアレはですね〜名物？と言うか日常茶飯事ですてアツ！丁度良い機会ですから私の得意魔法をお見せします！」

と言ってなんか頑張つて魔力みたいなヤツを溜めてる？てゆーか得意魔法って？そっいえば家庭魔法から古代殲滅魔法までとかいつてたな〜、殲滅つて大丈夫かよ？

「ルカ・ハートルク、戦名>いくさなくを明星の空術師」

「いきます！  
輝け「レイジング メテオ」  
ヒュ〜 ズガガガガガアン！」

魔法つてちよ〜こえ〜！

何アレ？隕石？メテオ？子供が一人で隕石落とすって何？大人になつたらコロ〇ー落としてですか？、神奈は目をキラキラ、今のヤツのどこにそんな要素が？、不意打ちで隕石落として小さい胸張つていかにも「エツヘン」ってやってるルカもどうよ、ネコはネコなのに「ほお〜」とか感心してるし、俺だけか、この状況おかしいと思うのは、さっきの人助けた方がいいと思うのは、俺だけなのか、まあ気が動いてるから死んでるところかピンピンしてるっぽいけど。

土煙が晴れて大小無数のアナがあいてるよ、……やっぱりほぼ見た目無傷、なんか見たことあるような顔してるぞ。

「もお〜ルカ〜 いきなりじゃないやりすぎよ〜殲滅級なんて」

スツとルカの後ろに現れた人見た感じと声から女の人だな、今のが  
転移魔法か〜ふ〜ん

「わっ!? ビックリした母さんいきなり出てこないでっば心臓に悪いでしょう!」

「ゴメンゴメン はっはっは!」

…今なんと?

「ハイ!ルカ先生!質問!」

「えっ、えーと、ハイ神木君」

「ハイ!ソチラのいらっしやいます、見目麗しい女性はどなたでしょう?我が輩の聞き間違いでなければ「母さん」と仰いました、まさか教官の母上殿でありますか?失礼ながら年はいくつでござるか?」

「太陽?言葉が変だよ」

「あらっ、アナタは初対面の女性に年を聞くの?」

「いえ、親子というより姉妹?とか思いましたは。」

「や〜ん、誉めても学園入学位しか出来ないわよ」

「っイヤイヤ十分凄いですよ?誉めただけで入学って大丈夫か魔法学園?というかアナタ何者?」「この学園の学園長」

「マジでっ?じゃあるカって学園長の娘?超リッチじゃん?セレブじゃん?ブルジョアじゃん?」

「そんなんっ、そこまでお金持ちじゃないですよ」

「いいな〜私も財宝風呂とか札束布団とかしてみたいな〜」

「金持ちのイメージが古い?いつの金持ちだよ一体?」

「よし一回落ち着こう!」

「ふむふむ なるほど異世界」

「まあこんな所ですか?」

「召還魔法で来たなら召還者が側に居るはず、うん聞いたこと無いな、凄く気になるな、まあいいや。」

「母さん、お二人を入学させてあげませんか?」

「いいよ」

「軽いっ!!学園長でしょう?!」

「まあまあ入れるし良いじゃない、野宿しなくて良いし、ご飯食べれるし、ここがネコさんの言ってた集合場所でしょう」

「ああまあ、そうだな」

「とりあえず、

宜しく願います!」

「願います」

「ハイハイ、了解、今日はまあ寝てて良いよ、疲れたでしょう?」

「ありがとうございます、休ませていただきます」

「堅いな、まあいいや、明日いろいろ身体測定とかして明後日くらいから授業ね、オヤスミ」

## 学園の外

「疲れたっ　なんだよっ学園全然近くないじゃん、あの筋肉才力  
マダルマのヤツ次会ったら張り倒す！、大体神とか意味解んないし、  
六人の一番なんて誰でも良いじゃん、ハアゝ俺以外全員戦闘好きと  
かだったらどうしよう？.....鬱だ　死のう。」

ツッコミだっているポケたい！

ネコ視点

「ふむ、良い朝じゃ、候補者二人！若いのに寝坊か？、いくら昨日の夜にハッスルし過ぎたからといっても、若者が朝から布団でぐうぐうとは。」

「俺の理性は鉄壁俺の理性は鉄壁俺の理性は鉄壁俺の理性は鉄壁俺の理性は鉄壁俺の理性は鉄壁俺の理想は鉄壁俺の理想は鉄壁俺の理想は……」

ふむ、ツッコミどころか正常な思考も出来ぬか？まあ、仕方在るまい 今の状態では、ある意味男だな……

「大丈夫か？…お主？………おい………聞こえてないな……」

昨日の夜

「あの…えっと…すみません！…今別の支部から生徒が来てまして、

部屋が一つ、一人部屋しか空いてなくて……」

ピーポーピーポー緊急車両、通りまゝす！……年頃の男女が同じ部屋なんて……アイツの顔は可愛いのは認めよう、ファンクラブとももあるし……だがしかし性格の問題で女として見ていなかったが、今のコイツは違う……不覚にもドキッとしなくてもない、しかも一人部屋って事はベッドは一つ……無理だ！、男の子なめてんのか？、襲うよ、襲っちゃいますよ？……そうだっ！コイツをルカの部屋にぶち込んで！

「ちよつと待てるルカ！コイツをルカの部屋に」それって、太陽と2人つきり？私はそれでも……なんて……」……ばかたれえ〜！」  
ペチコンッ

「イタッ！ちよつと何をs「お黙りなさい！アナタは、自分の言ってる意味分かってらっしゃる？」」  
……わっ分かってるよ……その……優しくしてね／／／／／」

全然全くこれっぽっちも分かってないじゃん！？何？優しく？受け入れてんなや！アンタ、バカだアホだと思ってただけ……まさかここまで……

「何を言ってるんですか如月さん！、2人つきりな訳無いでしょう！ワタシも居ます！」



……………へっ???

「空いてる部屋ってまさか、ルカの部屋でしょうか？」

「えっ／＼／ハッハイ！そうです」

危険が二倍に増えたー！！

「あのっワタシは、優しくってゆうか、勿論優しくしてほしいですけど、その…ちょっとだけ、苛めてほしいな〜なんて／＼／＼／／」

何言ってるのさ、この子

今サラッと核爆弾発言しましたよ

苛めてほしいなって、ソッチ？

ソッチ系？ルカは普通の可愛い子だと思ってたのに……

「そっそれで／＼／その後にもたぎユツとして欲しいなんて」

「ルッルカさん？ギユツとして欲しいなら何時でもしてあげるから、苛めるとかそんなのは無しで……」

「ふえっ？／＼／／わっ分かり……ました……シユン」

何故シユンとする？ヤッパリソッチ系？Mさん？そうなんですか？

……あゝヤバい、なんか今のルカ見てるといじりたくなる

「ふ〜ん ルカは俺に苛めてほしいのか〜、ルカって案外変態さんなんだね〜、自分から苛めてほしいなんて」

俺は笑みで顔をコーティングして猫なで声でルカの顔を覗き込む。

「／／／ちっ違いm」なにが違うんだよ、ルカが自分で苛めてって言ったんじゃない」／／／わっ私は…変態さんじゃありません！

ここに学園長が居なくて良かった、自分の娘が変態呼ばわりされたらキレるだろうし

「なに言ってるんだよルカ、自分から苛めてほしいなんて明らかに変態さんじゃないか？」

「ちっ違う…私…変態さん…なんかじゃ…私…私」

「なんだよルカ、変態さんは罪なのか、お前は俺に言ってくれた、皆と違うのは罪じゃないって、なあ変態ルカちゃん？」

「!?!? つ私は…そんな…グスツ…違う…スン…もん」

ピキーン

俺の本能が告げている今だ、最後の仕上げだ、Gooー!

ギユッ

「ルカ、大丈夫だ、冗談だよ、お前は悪くないから、大丈夫、抱きしめてやるから」

アウトサイド

「むゝ私だって…太陽にだったら苛められてめ何されても、大丈夫だもん!？」

「まあまあ娘よ、良いではないか、…しかし、あの男、人心掌握も出来るのか?」

「ニヤゝゝ!後で殴ってやるゝ」

しかし、あの様子はまるで…

サイドアウト

「おかえり……」

「なっ何だよ？ジト目かよ？」。 。 。 べっつに」

「喧嘩売ってんのかコノヤロ」

「まあまあ、娘は自分に構ってくれないから拗ねてるんじゃ」

「ちっ違うもん／＼／＼／」

「あゝハイハイ、ツンデレ、いやデレないからツンドラこゝ」

「そう見えるなら、鈍感もいよいよ病気の域じゃな」

「人をいきなり病気扱い！？」

「大体俺鈍感じゃないし！、気配とか読めるし！」

「ハアゝ もういいよ」

太陽はいつまでたつても太陽なんだね。」

「何その暴食シスターの例え？」 「そういえば、二人の空間はもういいの？いろいろ話していたが」

「ふえっ／＼／ハツハイ／＼／／／」

「ふゝむ、すっかり虜じゃな、さながら調教のような話し合いじゃつたしな」

「なっ、調教とかいうなよ！？怖いっつーの！危ない奴か！」

「今の会話を録音して流せば、10人の内10人は調教と言っじやろっつな」

「なんで！？どこがどう調教！？おイルカっお前からも言ってやれ」

「調教………／＼／＼／／／」

「コラコラコラ！！赤くなるな！」

「ホレ見ろ、完全に調教完了j」 「やめろ、これ以上やるとこの小説18禁になる」……もう遅くないかの？」

で…結局三人で川の字に寝た、頑張ったよ！！床で寝るとかソファ  
ーで寝るとか、でもそのたび泣きそうになるし、そんな顔されると  
また、いじりたくなるじゃないか！…ゴメン、……俺の理性鉄壁説  
は俺の身を持って実証された、ホントダヨ

「太陽はげこ〜！アアン！」

寝言だよ！これは寝言だよ！大事な事だから二回言ったよ、寝言で  
喘ぐな、気持ち悪い！、それに比べてル力は…完璧な寝相、髪の毛乱  
れすら見つからない、さすがはお嬢s「ハアツ！もつと、もつと、  
アアン 太陽様」聞いてない聞いてない聞いてない聞いてない聞  
いてない、ル力は何も言っていない、俺の名前に様付けで求めたりな  
んかしてない

「現実逃避はそこまでじゃ、早く起きんか若者たち！」

「俺は最初から起きてるよ」

「お主もやはり男、二人を相手にあそこまでヤるとはの〜」

「何もしてねえよ！？ていうかお前は喋るな、18禁になる」  
「据え膳喰わぬは男の恥じゃ、お主は最早恥の塊じゃな」  
「もう生物所か形もない!?」  
「まあまあ、それよか転入生二人、今日はいろいろ測定の日だよ」  
「?!?!?!?!ビクッ……………俺の後ろに立つな」  
「お主よ、ツツコミがボケてもおもしろく無いぞ、それにこの世界にゴル○13は無い」

「今から第1回、キャラ会議を始めます！議題は俺以外のツツコミについてです」  
「ハイ議長、ツツコミは議長一人で十分では？」「最近キャラが増えてツツコミが忙しいのです」  
「それでは、皆さんボケを控えるのはどうでしょう?」  
「最近一番ボケてるのはキミですよ、ルカ副議長?」  
「それではどうしようも無い、ワシはツツコミは出来なくはない、がしたくもない」

「会議の結果ツツコミは議長一人で頑張れとなりました」  
「頑張つてね！太陽!」  
「つまり変わりなし、と言ふことじゃな、ふむ」

「……………いつか辞めてやる」

「ハイハイ！ボケは終わりみんないろいろ測定行くよ」

「…ハイイ」

この世界には魔力が普通に、当たり前前にあるらしい、まず一番最初に魔力とは神の血に宿るらしい、人間に神が血を与え、そこから世界を人間が作って言った（創世記と言っらしい）、だから魔力が強い＝神の血が多いらしい？、人間全てに神の血は薄い濃いあれどあるらしい、だから魔力のない奴なんていない、らしいのだが……

「魔力値…0です…」

何でさ！？俺って神に成れるって言われなかった？？これはひどい、特に空気が死んでる、ヤメロそんな目で見るな！、

「……………そうだ…首吊ろう…」

「はっ早まらないで下さい！」

「そうだよ、もっかいやる？」

「H A H A H A！…ちよっとロープを探して来る…」

「気にするな、お主は候補者の中でもかなり異質だからな！」

「…何？それで慰めてるつもりか？」

「なんじゃ？担当のヤツから聞いたらんのか？お主の神の資質は他の候補者に比べるとかなり異質でなあ、そもそも自分に何の資質があるか、知っておるのか？」  
「…神のツツコミ？」

「確かに神がかつておるが、

お主の資質は神の「力」じゃよ」

「それって、腕力とかそういう汗臭いヤツですか？」

「違う、…お主よ、神が神たる由縁はなんじゃ？」

「…あゝハイハイ、なんか分かった、ていうか俺大丈夫か！？また化け物に近づいた…ハアゝ」

「うえっ！？何？どんなの！？」

「詰まりじゃな娘よ、神は何が出来る？」

「えっと…何でも？」

「そうじゃ、詰まり「力」とは神の創聖力の事じゃ、まあ生命の想像は最高神の特権じゃがな」

「太陽様、要するに何でも出来るって事ですよね？」

「そうじゃねえの、ってちよつと待てルカ、何故に様付け！？」

「えっ！？それは…ご主人様に様付けは当然かなって…  
／／／／

「おかしい！、俺がいつお前のご主人様になつた？」

「昨日の夜です、ワタシをいろんな方法でなじり、いたぶり、屈服させ、最後にまた、ギユツとしてくれました／／／／／／」

「待つんだルカ！、頬を染めてもお前の幻想だぞ、ソレは」

「まさか本当にやっていたとは、さらに一晩でご主人様と呼ばせるお主よ、神の候補者を辞めて調教師をしたらどうじゃ？、勿論、人のじゃぞ？」

「やってないし、呼ばせてない！！」

それに調教師なんてやらんわ！！人のなんて恐ろしい事いうな！」

「太陽様の…調教師…スゴクイイ…／／／／／／／／」



「ダメだ、ルカ、キミはもう帰りなさい！！キミはこれ以上変態さんなるんじゃない！！」

「変態さんでも気持ちいいなら、もう何でも良いです！！、それに普通じゃない、皆さんと違って罪じゃないって言ってくれました、……それとも私…一回だけで使い捨てですか？…そんなゴミみたいな扱い……良いかもノノノノノノ」

「太陽っ！！どうゆう事？！」

「待て待て一回だけでって一回もしてないだろうがっ！、それにルカ、普通じゃないのは罪じゃないけど変態が開き直ったら犯罪だ」

ハアハアツ　こいつらのポケラツシユ、（ルカと神奈は真面目だが）を一人で捌くなんて…ヤツパリ俺って神のツツコミ？

「いやあゝゝん　助けてえゝゝん」

この無理やり高くしたような声は…

「おやつ？　あの声はお主の担当ではないか？」

フハハハ　あの筋肉オカマダルマ…ストレス解消にボコにしてやんよ

「待て〜!!この肉人形〜」

あれ?この声どっかで?

ドゴオーン

ドアが粉々になり代わりに筋肉がボウリングの球のように転がる、  
そしてピタリと俺の前で止まった

「助けてえ〜〜ダ〜リン〜」誰がダ〜リンだ!死ぬ筋肉オカマダル  
マ

ドスツバコツゴスツバキツ

「ちょっと痛いってばっ痛いっちょっとストップ」

あ〜ちょっとスッキリした

「もおー せっかく三人目を連れてきたのに」

「どこいった？肉人形？！」

土煙が晴れてそこに立っていたのは

「あれっ……まさか……太陽？……」

「……………ゴメン誰？」

「……………間違いなく太陽だね」

次回、新キャラ&名前公開

仲間は多い方がいいって事も無い！…まあ人によるかな？（前書き）

長い方がいいのかみじかいのがいいのか…悩む。

仲間が多い方がいいって事も無い！…まあ人によるかな？

突如ドアを壊して現れた筋肉オカマダルマ、溜まっていたストレスを容赦なくぶつける主人公、そして現れる候補者の「三人目」らしき人、今この小説に新たな歴史のページが加わる！

最初からうるさいな、いい加減にしないと肉体言語で O H A N

A S I するぞ

作（リリカルなの○！？、つゝか前から思ってたがお前ちよいちよいオタク入ってない？？」

入って無い。俺に入ってるのは夢と希望とインテルぐらいだ

作（そうかお前はパソコン機器だったのか）

内側から虫に喰わせるぞ！

作（ツッコミ入れてキレルってどうよ！？ボケたのオマエじゃん）

よく知らないのにツッコむからだ、それに最初からテンション高いお前が悪いじゃねえか！」

作（フッフッフ！俺は最初から「クライマックスなのか？」先に言うなっ！！！！）

お前こそオタクだろ。

いきなり仮面ラ○ダーて

作（フツ！敢えて言おう、オタクであると!!！）

高らかに宣言されても…

「おい聞いてやがりますか？」

おっと、俺としたことが電波野郎の所為で無駄極まりない時間を

「悪い、何一つ聞いてなかった」

「ハア、お前は相変わらず、唯我独尊と言うか傍若無人と言うか、まあお前らしいつつたららしいけど」

ていうかこの人誰よ？

さつきからまるで昔からの知り合いみたいな口振りじゃん、こんなイケメン野郎知り合いに居たっけ？

「なあ、まず聞くけどさ、

あなたどちら様ですか？」

「そこからっ！？いくら昔だからってただか二年だぞ！！お前は二年で友達忘れるのか！！」

「まあ、分らないのは事実だけどさ、俺の数少ない友達にお前のようなイケメン野郎いたかな？って思っつて」

「確かに顔や身長もちよつと変わったけどさ……」

あとお前にイケメンとか言われたくない！」

「嬉しくないのかよ、

…イケメン太郎君？」

「誰がイケメン太郎だよ、お前が言っつとイヤミにしか聞こえねえよ！」

「で、神の候補者三人目よ！」

「話変えすぎだろ…名前も思い出してないし、」

「じゃあ自己紹介！早くしろ！！」

「ハア〜 クロノだよ、須上クロノ！」

「クロノ…クロノ…クロノ…、あぁっ！！チビクロノか〜、っつてええ〜！？」

「また懐かしいあだ名を…」

「お前っ…チビじゃないじゃん」

「当たり前だ！もう高二だぞ」

「じゃあチビクロノじゃないし、また新たな名前を授けてやろっつ」

「お前は何者だよ、ハア〜」

コイツを抑えられるのは神奈ぐらいだしなぁ〜、相手するの俺か…  
…ハア〜」

「あぁっ、神奈ならそこに居るじゃん、もっとも、なんかいろいろ違っつけど」

「えっマジでっ！！どっにいつ……」

いきなりの筋肉オカマダルマの襲来にビックリして、そばのルカの首に抱きついて気絶した神奈と、首を絞められて顔の色とかいろいろヤバイルカがいた…

「いやっ 助けなきゃダメだろ」

「いや〜ゴメンねルカ！」

悪びれずにニコニコしながら謝る神奈、首キメといてゴメンで済むか？、いやっルカは認めたくないが変態さんだ、大丈夫だろう

「ゴメンじゃありませんよ！私を苛めていいのは太陽様だけなんですから！それ以外はただの苦痛です！」

俺に対してだけ変態さんなの！？



何故だ、どっかの変態になすりつける筈だったのに、これじゃあ一生変態さんがつきまとして来る!?

「太陽、お前しばらく見ない内に変な性癖が……………」

俺はお前がどんな奴でも友達だぞ」

「俺にそんな性癖はない!

というかアレはほっとけ、関わったり深く追及するなら、お前の喉に穴あけてリコーダー突っ込んで「G O D K N O W S」演奏するぞ」

「…マジで怖いよソレ……………」

「でも良かったね!六人の一人が知り合いで、あのチビクロ君がこんなにおつきくなるなんて思って無かったけど」

「なあ…マジで神奈か?…」

まるで別人じゃねえか?神の人格ってこんななの訳?」

「こんなのって何よ!!そういうクロノはなんか出来るの???」

「なんか神の脳だつてさ、よく分からんし、何に使えるかも分からん!」 「胸張って言うことじゃないし、要するに只の役立たずじゃん」

「そう責めてやるな、コイツが役立たずなのは昔からだ、今までと変わらん」

「久しぶりに会った友達をいきなり罵倒するか普通?」

「まあクロノはもういいとして、残りのヤツらをどうするかだな」

「ああそうだな、俺の事は置いておけ…、そしてこれからを考えるぞ!」

「どうするか考えるってどうするの?」

「危なそうな候補者だったら……………叩き潰そう!」

「結局殺し合いじゃん!」

俺はまだ罪を犯したく無いぞ」

「ふむ、殺し合いにはならんだろう、筋肉オカマダルマが言ってる  
か知らぬが候補者は皆子供じゃぞ、それに全員面識があるはずじゃ」  
「そうなのか!?…あんの肉ダルマ…次会ったら殺る!、……クロ  
ノ?どうした?」

「……ネコが喋った?」

「ふむ、イカにもタコにも「ふにやー!」なっ!ちよっやめい!  
にやっ!?!どこに触っておるか!?!」

「ふにやー!コイツめ〜このこの可愛いヤツだな〜」

「お〜、ヤツパリネコ好きなのか、昔と変わらんな〜」

俺はまだ罪を犯したく無いぞ」

「イヤだよ、ソイツネコ好きでヤバかったし、邪魔したらマジ切れ  
するし」

「にやっ、娘!娘っ子!

二人して見てないで助けぬか!?!」

「なんで?可愛いじゃん!」

「そうですよ、ゴロゴロするのって気持ちいいし」「にゃん!そう  
ゆう問題では、にやっ!?!、ないじゃろ、にゃあん!?!」

やっぱりルカもネココミミなだけにネコなのか!?

ていうかネコがさっきからヤバい声を!? 喘いでるような、艶やかな声を挙げてるよ。

「なあルカ、ネコってあんな風にされたら気持ちいいのか?」

「そりゃあもう、あんなにされたら気がおかしくなっちゃいますよ、気持ちよ過ぎて」

そうなのか、大丈夫かよネコ?、まあ助けたりしないけどな、フッフッフこれでネコの弱みを握ったぜ!!、いつもいじられるからな、たまには仕返しを……あっ! 動かなくなった

「ムッフッフ　ネコネコ!」

今クロノのテクニックにより陥落したネコは、大人しくクロノの膝の上。

「おまよ、……恨むぞ」

「さてみなさん、六人全員が子供で面識があるとの情報でいけば、殺し合いなんてアホなことにはならんだろう、……多分」

「多分てのはお前の知り合いにアホが居るって事か!？」

「こんなときだけ鋭くなるなよ」

「居るのか?居ないのか?」

「………居るような居ないよ」どうなんだ「………戦闘狂が「いるんだな!!」………大丈夫だって!知り合い全員の内の1だけ、ソイツな訳が「お前の知り合いなんて30人いるかどうかだろ!」………失礼な!?!35は居るわ!!」「社交性皆無は治ってないのか!?!、ハア、こつちの世界に来るのは資質がある奴だけ何だろ?、その35人で資質ありそうなのは?」

「………さっきの戦闘狂とかお馬鹿まっしぐらなやつとか近所のオバサンとか?」

「オバサンて誰!?何の資質!？」

「オバサンの作る肉じゃがは

まじでパネエよギガウマだぜ」

「肉じゃがで異世界きてどうする!!何も出来んだろ!?!」

その後も、訳無くボケとツッコミを繰り返していた時に、バンツとドアが勢いよく開け放たれ……

「ルカさん、侵入者です!」

城門付近

---

「ふう〜、この世界の人は面白いな！手から火が出たりするしな、六人の人たちはどんな人達だろう？ワタシを追い詰める人は居るだろうか？なんだか少し楽しみだなあ！」

今回は、C.V. 沢城みゆきが合うような新キャラ登場！！  
新たに迫る脅威！  
離れ行く仲間たち  
決まった方針の先には！？次回も見ないと〜  
O S I O K I よっ（嘘）

大切なのはお金や友達や家族ではなく……もちろん自分！（前書き）

狂おしくも愛おしい……ヤンデレ……

大切なのはお金や友達や家族ではなく……もちろん自分！

「デメエは!？」

「久しいな！私はアナタを探し、求め続けた、そして今ここにアナタと再会した…これはまさに運命、デイスティニー！  
さあ、始めよう！これが私の7年のすべてだ!！」

「……何を?……つーか誰？」

「……グスッ……バ  
カア……」

今廊下を走りながらルカの説明を聞いている、この学園には国の権力者の子や一国の王子や王女もいて、ソレを誘拐して悪い事しようとするやつが結構な数いて、そのバカどもを撃退するために学園には…ナンたらカンたらシステムとかで敵を見つけ生徒や先生で袋叩きにするというなんともエグいシステムがあるようだ、しかし今回の敵はそのナンたらとかをガン無視で来ていたようで、既に数名が撃退に行ったが帰ってこず連絡も無いという、そこで我らがルカ様に泣きついて来たわけですよ。

「しかし、敵も大胆だな」

まさか歩いて乗り込むなんて」

「そうか？それくらい普通じゃ」「普通じゃ無い！」「……い  
いもんいいもん！どうせ俺普通じゃないし」

「でもその敵って何人なの？」

「報告では一人だと……」

「一人で歩いて堂々正面突破、

敵ながら天晴れなやつだな……」

「……で、敵さんはどんな魔法を使っただ？こんな事できるって、  
どこのチート野郎？」



「そっそれが、敵は魔法らしきものは使ってないと……、ただ単純にビュツときえてバツと現れたら、みんながドサツと倒れた、だそ  
うです」

「……おいおい、どんな最強だよ？」

「そんなの魔法無しで出来るの？」

「……………（ここで出来るって言わない方がいいな）」

「とにかく、皆さんは下がって居て下さい！！あなた方はまだ学園の生徒ではありませんから」

「太陽ならともかく、俺と神奈は何も出来んだろ？」

「ともかくって何！？お前ら魔力あるじゃん！魔法使って戦えよ！  
！」

「ええ、私アブナイのよりも空とか飛びたいな！」

「いきなり飛ぶは無いだろ？  
やっぱ最初はメラだぜ！！いやっファイヤかな？」

「畜生！！俺だってなんかスゴいことしてやる、魔法なんていらな  
いやいっ！」

「お前のはある意味魔法よりもよっぽど反則だろうが……」

「そつだよ、創聖力ってモロ神様じゃん」

「……………そういえば、力で炎イメージして出したら、メラ打てん  
じゃね！？空だって飛びたい放題？」

「……………侵入者よりも危険だな」

そうになると、いろんなゲームとかアニメとかマンガの必殺技が思い  
のまま……………ヤバい、こんなところで現実逃避の二次元ネタが役に立

つなんて、神は俺にこの事を予期して俺に現実逃避を？……………  
て、んなわきゃない！  
とにかく侵入者よ、お前は俺の実験台一号だぜ！！ハハハッ

「……………何この戦場？」

コレなんてムリゲー？  
あちこちで火やら雷やら飛び散ってるし。  
よく見ると全員一点を目掛けて撃ってるっぽいけど……………氣の氣配的に居ないよな？……………あつ、ちょい離れたところにスゴい氣が……………  
つちに来るし

ズドオオーン

ウルサイ爆音と土煙と人が  
ほぼ同時に上がる、そして土煙の中から明らかにこっち、正確には

俺を見つめるクリつとした目、土煙が徐々にはれていき次第に姿が見え始める侵入者A、なんとなく満足げな口元、クリつとした目、短めの髪を風になびかせている、この特徴を結び合わせた結果、自分の知り合いに該当するのは……

「テメエは!!」

侵入者がピーチクパーチクウルサイが気にしない、コイツ…見たことあるようなないような……

侵入者が喋り終わったようだが、ほとんど聞いてなかった自分に分かるはずなく僅かに聞こえた「……始めよう」と自分の今の心境を素直に聞く

「……何を?……つーか誰?」

死んだように動きが止まる侵入者A、そして微かに震え始め……マジ泣きし出した

ってちょっと待て!?!なんで!?!何いきなりマジ泣き?えっヤバイよコレどうする?ルカみたいな羞恥心とかの泣きじゃないし、泣き出す瞬間自分の世界が崩れ落ちた的な顔してたし、あくどうすれば?

「……………なんで……………」

「うえっ!?!何どうした?」

「どうして……………覚えて……………ないの……………」

「覚えてって、わかんねえよ!?!お前初対面じゃないのか?」

ピクッ

「初対面?……………なんで……………覚えてない!?!……………私は!?!……………私はあの約束通りに会いに来たのに……………ツライ時や悲しい時も約束を守るために頑張ったのに……………覚えてない??!ふざけるな!?!……………覚えてないなら思い出させるまで、……………約束と一緒に無理やりに思い出させる!?!……………」

「えっちょっと!、待てよ、いいから話し合お「ブンッ」!?!?!!?!!危なっ!?!?!!……………」

マジか？どうなんのコレ！！

約束って、いつ何処で誰が何を約束したか教えてくれなきゃ分からん！

約束覚えてないだけでいきなりブチ切れって、どこのサイコ野郎？

「嘘つき！嘘つき！嘘つき！

強くなればまた会える！、会えたらまた一緒に遊びの続きをしようって！あの時言ったじゃないか！？」

.....ダメだッ

このまま倒すのも負けるのも、この子が抜け出せなくなる。

かといってこのままはキツイ.....しかし.....コイツの戦い方.....どこかで.....

「あの日、一人の私に手を差し伸べてくれたアレも、ツラくて泣いた時隣に居てくれたアレも、二人で遊んだアレも、全部、全部忘れたのかっ!？」

………そんなのあったか!?  
泣いてる男を慰めた事なんて………待てよ!コイツ男か?ズボン  
と言葉遣いで判断したが…

「ちょい聞きたい!お前は男?」

「それすら覚えてないか!嘘つきめ!私は女だっ!!」

話しが見えてきた…  
泣いている女の子に約束………あっ!!

「お前、すばるか?紙桐 すばる?」

ビクッ

動きを止めて黙る…  
沈黙もまた肯定!





「でだ、お前が4人目なのか？」

「えあ／＼、そつそうだ！私が候補者の4人目、神の精神だそう  
だ」

「神の精神って、さっき思いつきり錯乱してたじゃん、神が錯乱っ  
てシヤレで済まないだろ！？」

「あれは仕方無いのだ、あの約束は…私の生きがいだから」

「……（そんなに遊びたいのか？）」

流石は我らが主人公！

鈍感！

クロノサイド

「「「.....」」」

「どうした？固まって、  
犬のウンチ踏んだか？」

「お前はスゴいよ、修羅場にすら動じず冗談かますなんて」

「修羅場？修羅なんてどこに！？」

「まあいいや、あの子見た感じ普通そうだし.....これでシッコミミが  
楽になる.....」

「あなた方は何だ？あの人にくっつく汚れか何かか？」

「あら、汚れではありませんよ、私は太陽様に全てを捧げた奴隷です！」

「…そうか、では私の後輩だな、私は7年も前からあの人の奴隷だからな」

「くつ、…年数なんて関係ありません、大事なものは誠意です、主の望みなら何でもする、コレが大切なんです！」

「ふふん、私は何でもやったぞ、お風呂で体を洗ったり、朝起こしに部屋を訪ねたり」

「そんなの！！今からならすぐ出来ます、明日の朝にでも…」

「私がそれを許すとても？」

「甘いな！今日から全て私の担当だ」

「へへくん、私は小さい時一緒にお風呂入った事あるし、毎日家に行って起こしてたもん」

「神奈さんはきっと友達ですよ、今も昔もこれからも」

「だろうな、あなたでは無理だ！」

「この前会ったばかりと、昔ちょっと会っただけの二人にいわれたくないわよ！」

ツツコミの居ない会話はだめだな、太陽は前を歩いているし、……俺か！？俺なのか！？またツツコミか！？……まあほっとこうかし、この子が戦闘狂？いい子そうだが……

「なあ太陽？あの子が例の戦闘狂？」

「ん？ ああそうだよ、……安心しろアイツは自分より強いヤツしか喧嘩しないから」

「ああ？何でだよ、自分より強いヤツと喧嘩したら負けるじゃん」

「……………追い込まれるのが  
良いらしい……………」

「……そうか、お前は昔からお前だったんだな！」

コイツの周りは変態だらけか！？……いや、それだと俺も変態になるのか、いやっ違う！俺は変態じゃない！

「何話してるの？二人とも」

「ああ、まあ、…世間話？」

「ん？疑問系？…怪しい」

いつの間にか後ろに三人が、………なんだこの威圧感は！？この三人、今ここでやり合うつもりか！？…いや違う！これは…

「なあ神奈？お前らこの後になんかしてかすつもりだろ！」

「しでかすなんて、ただ単純に太陽を取り合おうとして、今から気合いを入れてるだけだよ」

「おいおい、俺は物か！？ 取り合おうって俺の意見は！？」

まあこの鈍感なウザイからな  
彼女が出来たらマシになるか

サイドアウト

「あゝしんど！一生の心拍数は決まってるんだぞ、今日1日で心臓ヤバいって、俺の寿命減ったよ」

「変な事言うな、俺だって寿命減ったよ」

「さて、ねえ太陽？今からヒマでしょ？、今からゲームしたいんだけど、いいかな？」

「あああゝいいよ〜」

「『第一回！太陽の隣は誰？大会』！」

……いきなり何さ？

やって来ました！ゴールデンウィーク！（前書き）

短くて涙がでちゃう

ダメ作者だもん！



やって来ました！ゴールデンウィーク！

ここは学園の一室、やたらと物が充実してるな………で、何か始めるつもりらしいが……

「なあ、なにやるん？」

「だから、太陽の隣を決めるの」

「隣って、そんなの誰でもいいじゃんよ、疲れたから来ていいかね〜」

「ダメだ！アナタには三人の内を選んでもらわないといけないからな」

「……なあすばる？、まだ会ってからアナタとしか呼ばれてないんだけど、昔みたいに呼んでくれよ」

「えっ、昔みたいにつて？／＼／＼」

「昔はなんと呼んでいたのですか？」

「昔のすばるは可愛かった…  
ああ、今でも可愛いか！  
で、昔はいつも兄上と書いて  
「にいっえ」ってな、これがまた可愛かった…舌足らずで上手く言  
えてないし」

「ちよつ、ちよつと待つて／＼／／」

「ふっん、可愛かったんだ…」

「へっ、そんなんですか…」

何？なんで無表情で棒読み？なんでそんなに黒いオーラが？目に光  
がないですよ！…ヤメテ！二人して睨まんといってお願いだから！

「あの頃は小さかっただけで、  
今は普通に発音出来ます／＼／／」

「ええ〜、兄上」にいうえ」って  
呼んでくれよ〜（、（、（）」

「顔文字って発音どうした？」

後寝るな、お前が寝たらツツコミが忙しくなる」

「だが断る、オヤスミ〜」

「……………にいうえ」ボソッ

ピキーン

「どうしたんだい、すばるたん」

「すばるたんって、お前なあ」

「いや…あの、やっぱりちょっと…  
恥ずかしい…だから偶に…ね！」

ズキューーン

「すばる、お持ち帰り決定だな」

いやだつてさ、顔紅くしてモジモジしながら上目遣い「少し涙目」  
つてお前、襲われても文句いえないぞ！、そのぶん俺は堪えた、萌  
え死しそうだったが飛びつかなかった、エラいぞ 俺！！

「ちょっと！？いきなり何言つてんのよ！！」

「そうです！お持ち帰りなら  
私が居るでしょ！？」

あゝハイハイそうだねゝ

「そんなのどうでもいい！」

俺の隣を決めるなら、これしか無いだろう

ゴクリッ！

「それはっ………いつたい何？」

「これだあゝゝ！！」

「「「なにいゝゝ！？」」「」

……  
「っておい、普通のあみだくじじゃねえか!？」

「普通じゃないあみだくじってどんなのだよ!

しかし、俺の隣は運頼みでしか勝ち取れないぜ!」

「あみだくじって席替えとかじゃないんだからさ!」

「……………えっ!？」

「そこから!？隣を決めるの意味から間違ってるわけ?」

「バカだとは思ってたけど…まじか?」

「いや、ちょっと難しい言い回し  
でいきなりだからよく解ってないだけだと思っ」

「うつせえやい!

じゃ隣ってどういう意味だよ!？」

「『『えっ／＼／＼それは／＼／＼』』」

「…もういい、眠たくなつた…」

「だあゝ！！もう訳不明だ！」

とりあえず、今日は寝よう！  
頭が使いすぎで割れる、マジで頭痛するし…

余談だが、6人の内4人が知り合いならバトロワにはならんだろう  
！…多分  
すばるがまた変なこと言い出さなきゃな…、言い出す前にお仕置き

でもして大人しくさせるか？  
いやっ止めとこう、俺が変態みたいになるだろ？

神様になつたらどうなんのかな？  
何処住むんだ？食い物は？基本何するの？

まあ、アイツ等いるからな  
つまんない事は無いだろうし

そっついや、ネコと筋肉野郎の親玉ってどんなのかなあ？まずひとの  
形かな？後二人の候補者がまともならいいなあ

????サイド

クッククッククック

「ご主人様〜?いきなりそんなセリフだと人気でないわよ」

「なあっ?! うるさい! 人気などどうでもいいのじゃ! 後鳥肌立つからご主人様って言うな!」

「ひどい、ご主人様〜!?!」

「まあまあやめい二人とも、主も牙を立てて威嚇するな」

「ふん!!! まあそんなのどうでもいいのじゃ! 早く神を決めるのじゃ!」

「そんなに早く決まらないわよ」

「それにしても、ご主人様ったらこの話の時はスゴく楽しそうよね」

「仕方あるまい、今まで子供の神など主だけであつたしの、友達に



でもなりたいのだろうな」

「もお〜ご主人様つたら〜  
可愛いらしいんだから〜」

ゾクゾクツ

「その筋肉！貴様その目で儂を見ておつたな！〜」

「えっ！？見ることさえ駄目なの？  
ひどい！あんまりよご主人様」

「やめんか！？ご主人様と言つな！体が鳥肌で戻らなくなつたらど  
うする！〜」

ギャーギャー

「ふふん、良かったな主」

人は辛いときや悲しいときに神にすがる、では神はが辛いときや悲

しいときは誰にすがればいい？答えはすがる事はできない

神は孤独な地位だ、子供には辛いだろう、だから六人がそれぞれ他の六人の、如いては主のすがる事の出来る、本来の自分で居られる「居場所」であるように、わしのささやかな願いじや

強くあれよ、子供たち

やることなすこと訳解らん！（前書き）

アレンジし過ぎた…

やることなすこと訳解らん！

コケコッコ

異世界に鶏っているのか！？

あゝクソ！朝の目覚めがツッコミで始まるなんて

「部屋から出ない方がいい気がする」

唐突にそう思う、何かいけない気がする、寝るときも胸騒ぎと言っ  
か予感と言っか、そんな感じがして試しに結界的な何かを創造して  
寝た、

まあ実際に結界的なのができるかはよく分からなかったしな、  
もし結界ができていてなにか良からぬモノが外にいたら、ソイツは  
ドアの前にいるのか？

「そんな訳無いか〜ハハツ」

ガチャン ギィ〜

ギィー ガチャン

「見てない視てない観てない看てない診てない実手名…」

違う、あれは人じゃない  
あれは…あれは……

ドンドンドン！  
ガチャガチャガチャガチャ

「ひい！？ たっ助けて、誰か…」

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ  
ガチャガチャガチャガチャ

シーン……

「終わった？…終わったのか？」

ドアには覗き穴がない、  
聞き耳を立ててみるか…

キュイーン

なんだこのビームをチャージ  
しているような音は？

「やっちゃえー ルカ〜」

「カッコいい！これが魔法か！」

「皆さん下がって、ドアごと壊します、」

「エクスプロージョン」！！！！」

……ヤバくない？

つつかヤバすぎだろ！！

ズガアアアン！！！！

「やった！魔法とはスゴいな！」

「それより、太陽探さなきゃ」

ヒュッ

ペチン パチン ドゴン！

「……ついつた〜い！？」「」「」

俺は爆発の瞬間に

さながらモンハンの緊急回避ばりのダイビング、映画のように爆発

が起こりそれをバツクにダイビングをした

すぐ犯人グループが分かり

素早く後ろに回り込み頭をそれなりに強く（一人グー）叩いた

「ちょっと待て〜！！なんで私はグーなのよ？音が違っじゃんか！  
」！

「そつだ！私はグーが良かったぞ  
パーで叩くなら頬か尻にしてくれ」

「はあ〜……快……感……」

「じゃかましい！

テメエはなんとなくグーだ！

お前は一体なにを希望してる！

ル力は今すぐ帰って病院いけ」

「なんとなくってなによ〜！

「なにとは、プレイの内容についてだろう？」

「病院……先生……手術……調教……」

ダメだ、後ろ二人は完全に



アブノーマル、異常だな、明らかにアホだ  
まだ神奈の方がましな気が…

すばるは開き直ってプレイって言うてるし、ルカは妄想が超人的レ  
ベルに達してるし

ギャーギャーやいのやいの

……………プツッン

「…テメエら…黙れや」

ピツタリ……………シーン…

「……………正座。」

ザッ！　ピツッシー

「オメエら、朝から五月蠅い」

「「「スミマセンしたー」」」

「で、今まで説教していた？」

「イエース」

「転入初日から遅刻ギリギリかよ」

そうです皆さん、今日は学園転入の日です  
今体育館的な場所で教師らしきハゲデブが喋っています

何でも学園は転入するなんて制度はほとんど無いらしい、だからって生徒呼び出してまで知らせる必要があるか？

「  
な訳です」

しかもハゲデブの話ほとんど聞いてないし、教師ナメられたら学園  
終わりでしょ？

まあ、話がつまらんからかな？

「い、おい、太陽！出番だぞ」

「うーん、あく悪い寝てた」

さっさと終わらせて寝よ

「さて、転入生の紹介は  
これで終わりです！

ここで学園恒例の～

「ドキドキ 全生徒で何でもアリの～リアル鬼ごっこ」イエー！

イエエエエエエー！！！！！！！！

「……なんでさ？」

「イエーみんな頑張るぞー……」

「セリフとテンションが合ってるねえよ」

「よくツッコミ出来るね？」

「流石には熟練者だな！」

「わあーきゃー言ってる場合か？  
俺ら4人対全生徒なんてさ  
理事長バカなの？…死ぬの？」

「お前とすばるは強いから大丈夫だろ？問題は俺と神奈だな」

「ふふふ、一対複数か…  
腕が鳴るな！」

「お前は一方的にリンチされてる」

「リンチ？私はアナタにリンチされたい、いやしてほしい、いやいやしてくださいお願いします」

「途中からただの懇願になってるぞ、気持ち悪いな」

「ふふっ、誉められた」

「誉めてないから！？キミバカ？」

「二人とも、話逸れてるから」

「結局、早めに捕まるか、二手に別れるか、ぐらいいしか思い付かないな」

「捕まったから死ぬわけじゃないし、俺は投降しようかな？」

ピンポンパンポン？

「転入生の4人に言い忘れてたけど、投降やら降参やらで捕虜になったらゲーム終了まではオモチャ扱いだからね」

「ちょっと待て！？オモチャ扱ってなにされんの！？」

「みんな顔が良いからね〜  
異性なら付き合うお願いで  
同性なら拷問やら魔法の練習代  
ぐらいで済むんじゃない？」

「済むんじゃないでは無いな」

「付き合うお願いなんて イヤ〜」

「拷問やら練習台って…」

「っ！放送に質問して返ってきた！？」

「そろそろ時間だよ〜  
みんな準備はいいかい  
レディ　ゴオオー！！！！」

「うわっ！！？始まったよどっしょっしょっ。」

「クロノと神奈は頑張れ…  
無理なら…異性に捕まれ」

「マジか！？付き合っただぞ！？？」

「そっだよ！！イヤだよ！！！！」

「オモチャ扱いはゲーム終了まで  
つまり一生付き合っ下さい  
とか以外ならゲーム終了で  
バイバイすりゃあいいだろ？」

「……………なるほど、それなら」

ドゴオオオオオン  
遠くで爆発が起こる…

「……………今のはルカの！？」

「ゲームのルールの…な」

「……………頑張れよ…太陽…」

「…とりあえず、俺は一人で敵を引き付けるから逃げろよ」

「死ぬなよ」

「頑張つて」

「御武運を」

ピーピー

こちらスーク!

俺は今ダンボールで言う名の  
ステルス兵器で敵を避けている

イヤーやってみたかったのさ  
リアルメ○ルギア!

「誰だ!?!」

しまった?動きすぎたか!?

ダッシュ and ボディプレス

「ぐあぁっ」

「そろそろいいかな?」



ここは広い草原的な運動場、  
ここなら暴れても大丈夫だな

「居た！転入生だ男だぞ」

「どこ？イケメンどこ？」

「男はお呼びじゃねえ！！」

「みんな行くぞ！！」

一斉に魔法を撃ってくる

…気絶で済むのか、コレ

ドカアアアアーン！！

ミサイル的爆音と土煙が上がる

「やったか！？」

誰かが呟いた

しかし

「うつ動いてるよ、まだ」

「んなアホな、あり得んて」

「でっでも、アレ…」

ビュユウウウ

突然土煙がけし消えた

風は吹いていない…

「ふう〜、あぶねえな〜」

現れた男、傷はおるか汚れ  
すら付いていない

生徒達は啞然、呆然、愕然  
まるで理解が至ってない様子

「さ〜て テメエら？」

生徒達が分かり易くビクつく  
腰の引けた者もいる

「飯喰ったか？

トイレは？

歯は磨いたか？

寝る前に神様に祈ったか？

もつとも

今祈る神様はこの俺だなア！」

男の顔はまさに狂氣的、狂っているとしか言いようが無い

「覚悟は決まったか？さあ  
テメエらの罪を数えろ！！！」



迷ったらいろいろ吹っ切れ！そうすれば楽になるから…

生徒サイド

……ありえねえ

こっちは軽く三十人はいる、  
相手はたった一人だぞ！しかも困んでるしだぞ！

なのに、なのにどうして…  
攻撃がかすりもしねえ！？

いや違う、確かに当たってる

当たっている筈なんだ、  
でもまるで拒絶されたように弾かれる…

これは魔法か！？…こんなの見たことも聞いたこともねえよ！！

「クソ?! 食らえ!!!」

「レイライジング」!!!!!!」

ピカッ      バチチチチイ

電気なら弾かれても感電するはずだ!

!!???      なんだアレは!?

あんな剣持ってなかったはず!?  
いったいどこから出した!?  
あれで何をする気だ?

「一刀……両……断!!!」

ズバァァァン!

……… 剣で魔法を切った? ……

「剣で人をきらないと切れ味悪くなるじゃん、だからさ……切られ

てくんない?」

お前の剣の為に切られるやつなんていねえーよ!?

「まあ、答えは聞かないし聞いてないけどさ…」

………帰りたい(泣)………

サイドアウト

「いやはせ、この学園は  
自殺志願者が多いなあ〜  
ゆとり世代が、甘ったれるなよ!!

ヒュ〜 ドカアアアアン！！

イヤー軽くラピユタの雷みたいなの出来たし、俺の力ってマジ反則じゃん？

「身の程をわきまえろ、お前らはラピユタ王の前にいる！」  
いつてみたかったんだよねえ〜

「ひっひけえ〜一時撤退だ〜！」

「王族相手にかなうはずない」

「みんな逃げろ〜！！！！！」

逃げろって、逃がすと思ってるの？んなわきゃないっしょ

「逃がすk「ピカアアン」

ウギヤ〜！！目が、目があ〜」

ヤバい！目焼けた！ヤバすぎ

マジパネエ！目玉焼きになる！

このままだとロリコン大佐みたいに自滅しそうだ！

え！？ロリコン大佐？

ム〇カだよ！！あいつヤバいだろ？



年下の女の子に妻になれって  
警察行きだろ？間違いないく  
ロリコンを汚しているぜアイツ

「あゝクソ！目がいた…いい？」

シーン…

ピュ〜

「風が…冷たいなあ…」

逃がした上に一人ぼっち…  
べつ別に！寂しくなんかないんだからね！！

……ツツコミが居ないと  
一人でバカやってる変人みたい  
……鬱だなく引きこもりたい

……早く終わらせて寝よ…

さっきの奴らは撤退の指示で  
全員同じ方に逃げ出した…  
つまりあの集団は部隊で統率  
して動いてるとかかんがえると…

「潰すのなら…頭からかな」

フッフッフ、やったぞ  
私の視点だ！これで出番が増えた！  
やはり正ヒロインは私だな！

「聞いてんのか？おい女！！！」

「ムッ！誰だ貴様等は！？」

「……聞いてなかったな」

うーん？見た目不良？イヤ  
盗賊や山賊？……アッ！  
世紀末のひてぶの人達そっくりだ

「いいかよく聞け！

俺らがお前を倒せば俺らのオモチャ扱いになるんだよ、つまりあんな事やこんな事もしてもらおう訳だ　ゲヒゲヒ」

「あんな事やこんな事とは>ピー<や>ズキューン<な事か？」

「おいおい、女の子がそんな事真顔聞くなよ……」

「負けるとは気絶または降参

のことかな？ならば大丈夫だ！」

「なんたく、この人数に勝てるだけでも　ハハハハハ」

「負ける事は無いな、気絶するほど私を気持ちよくできる者は居ない、そして降参するくらいなら拷問された方がマシだ、いや拷問してもらいたいな」

「「「「「「.....」」」」」」

「一つ言わせて貰おうか...

私をそこらのメスと一緒にしないでもらおう

私は豚であり女王様である

変態だ！　しかし私は「あの人」の豚であり女王様だ、貴様等のオモチャなどになるつもりは無い！！！！」

「...コイツマジヤバイよ...」

「だが！どうしても言うならば、かかってくるの良い、加減しないがな！！！！」

サイドアウト

クロノサイド

……死にたいよ

「でっでは、御名前はなんと？」  
「……クロノって呼んで下さい」

きゃーきゃー

俺は捕虜となり敵地に連行された

俺は始まってすぐに女子グループを見つけ投降した

そこ！へタレの何が悪い！

でっ今の状態は……

「それでは、すっ好きな食べ物は何でしょう？」

「……甘い物が割と好きです」

「「「「「きゃー！！！！／／／／「「「「」

何だよコレは！？俺はパンダじゃないんだぞ、何この野次馬？意味解んないし？質問も答える度に騒がしい！ダメだ帰りたい、元の世界じゃ無くて良いから

「あの、僕捕虜でしょう？  
牢屋入れるとか、監禁するとかしなくて大丈夫ですか…暴れますよ  
？」

「ですから、今みんなでアナタを監視している訳です」

「普通監視はこの間合いじゃしませんよ…手を伸ばせば触れる距離  
だし」

「細かい事は置いときましょう

、それともアナタは私たちを人質にしますか／＼／

「いやしませんけど……」

そういう問題じゃなくてさ

この密集形態をやめてほしい

部屋全体が女の子の匂いで

……ってヤバい頭がぼーっとして来た！

これはヤバいよ…特に理性が…

「……あの…！」

「どっ、どっしました？」

「え〜と／＼嫌ならいいんですが

…その…アナタの膝に…座って…いいです…か／／／／／／／／／／

「きゃーー」

「すごく大胆！」

「いいなあ」

そんな事されたら、襲いますよ  
僕の理性がもたないでしょ…

「あゝと、それは、えゝと」

「だっダメ…ですか？…／／」

「いいえ、全然OKツスよ！」

しまった〜！？しかしあんな顔されたら断れないだろ！！



ぎゃゝ、やめてくれ！

みんな一斉に飛びつくなゝ！

理性が俺の鋼の理性が

?!?!?ッ この柔らかい感触は？

「あつ…誰か…胸を…ひゃん／＼」

グハアゝゝゝゝゝゝ

…これは拷問だ…

サイドアウト

神奈サイド

「どうですか、お嬢さん？」

「すっすごく太くて…硬い」

「そっでしょ、フン、ハッ」

「じゅっ！…？…スゴい…です」

私は始まった瞬間に校舎に逃げ込んだ、そしてそこにはゲームに参加してなさそうな人達

「おや？きみは転入生の」

「お願い、ちょっと匿って！」

「うーん、……匿うと言われてもなあ」

「お願い、何でもするから、ね」

「何でも……フッフ分かりました  
では早速、此方へ来て下さい」

そう言いつつ服を脱いでいく人達

「ちょっと何をしてるの！？」

「何とは？……、何でもすると言ったでしょう？」

そう……この集団は……

「フンハツ、フン、ソオイ」

ボディビルダー倶楽部でした

へっ？期待はずれ？何が？

「どうぞですかお嬢さん？」

「すごく硬いねえ〜太いし」

「私たちは筋肉を愛し筋肉に忠誠を誓った筋肉集団なのです」

「筋肉に忠誠を誓ったって…」

「さあ、時間はまだまだあります  
すべてのポージングを見て下さい」

これはこれでなかなかキツイよ…

サイドアウト

ルカサイド

フッフ！太陽様を合法的に独り占めにできるチャンス、コレは逃せないです

太陽様を捕まえたら部屋に行って正式にご主人様公認の奴隷にしてもらって、その後は…次の日まで夜通しいじめて頂くのです

「フッフ、ウッフッフ！！」

「見てみる、ルカさんが笑ってるぞ」

「ちょっと怖いよ……」

太陽様！今すぐにアナタのルカがまいりますよ！！  
待っていて下さい！

サイドアウト

「ぶつちやけ、迷ったかな？」

主人公、只今迷走中！？



若さゆえの過ちって例えば？（前書き）

技設定がうまく書けないよ…

若さゆえの過ちって例えば？

「…へ〜、校舎以外にこんなのが建ててあんのか〜」

俺は来ましたよ！！敵の本部！

イヤー親切な人達が場所を教えてくれてさ〜、助かったよ！

えっ、その人達？今頃  
自室で震えてんじゃない？

あれは超笑えた！  
リアルに命乞いするとか…

プツ ヤバい…思い出し笑い

「しっかしさあ、敵陣に一人でカチコミってなあ、なんかつまらん！」

作（始まる前はビビってた癖に、力の使い方が判ったからいきなり調子付いてる…）

ウザいよ…作者…

マジで殺っちゃいたい…

作（だが断る！俺は死なない）

お前の答えは聞いていない！  
さっきのはただの願望で夢だ

作（お前の夢は生みの親を  
殺すことですか！？ちょー怖い）

もちろん夢で終わらせるつもりは無い！その内殺る！！

作（その内って！？マジヤメテ）

あ、ウザいし臭いしキモい

殺る時は出来るだけ苦しめて  
からあの世に叩き込む！

作（せめて優しく送り出せ！）

電波はここまでにしよう  
頭が悪くなるしな…

…やっぱり知らせてから攻撃した方がいいかな？

どうでも良いけどさ…

後から卑怯とか言われたらムカつくしな

（あゝあゝ、聞いてるか？）

みんなの前に居ますよゝ、殴り込みですよゝ！）

自分で作った拡声器を使う  
のはなんか恥ずかしいなあゝ

（早く出てこい！！君たちは



「そんだけ殴りや誰でも喋る！」

「失礼な！！殴って無い、蹴りまくったんだ！」

「余計タチ悪いわ！？蹴る方が痛いだろうが！」

「まあどうでも良い、かなりどうでも良いから

明日の沖縄の降雨量並にどうでも良いから無視して」

「無視！？ボケたの自分なのに？」

「こんだけで俺を倒すと？」

「どっかで無視ヤメテーとか聞こえたけど無視しよう！」

「足りねーなあ〜足りねーよ

俺とやるならS W A T連れてきな」

「訳の分からん事を、

この数に勝てるハズないだろ

みんな、コイツを袋叩きだ！」

ウオオオオオオ！！！！！！

ズガガアアアン

ババババアアン

ドガアアアアン

「へっ大口叩く割には  
たいし……た……事……！？！」

「パンパカパーン！！無傷！」

あらら、皆さん口が開いてますよ。はしたないですな。

「お、い、大丈夫ですか？」

「ハッ！、みんな起きろ！  
立って目を開けたままねるな」

「本当はさ、軽く気絶で済ませるつもりだったけど…」

「やらねばなしは趣味じゃねえんだよ！」



「みんな！白兵戦だ！行くぞ」

相手が一人でも白兵戦って  
言うのか？戦力はたしかに  
国ひとつあるかもしれんが

ウオオオオオ

「フツ　　甘いぜ、

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラ　　オラア！！！！」

バキバキゴキドストゴ　バコン

ドカアアアアン

「なっ、なんだあの幽霊!？」

「幽霊じゃない、スタンドだ」

俺は所謂ジョジョ立ち  
でビシツとポーズを決めた

後ろにはスター○ラチナ

殴られたやつは壁に  
突き刺さってピクピクしてる

「次! どんどんこいやあ〜!」

「くっ! 困んで一斉にかかれ」

バツ!

「無駄だ!

ザ・ワールド 時よ止まれ」

ウワオ！なかなか面白いな

「もう動いて良いぞ」

ズドオ〜ン！

時を動かすと同時に飛び交ってきたヤツ全員がぶっ飛んで地面や壁にめり込んだ

「さて、次はどなたかな？

と言いたいが飽きた！

もう終わらせる方向で」

「クソ！みんな行くぞぉー」

「クソ！みんな行くぞお！」

I am the bone  
of my sword

体は剣で出来ている

Steel is my body .  
and fire is my blood  
血潮は鉄で 心は硝子

I have created over  
a thousand blades  
幾たびの戦場を越えて不敗

Unknown to Death  
ただの一度も敗走はなく

Not known to Life  
ただの一度も理解されない

Have withstood pain  
to create many weapons  
彼の者は常に独り

剣の丘で勝利に酔う

Yet , those hands  
will hold anything

故に生涯に意味はなく

S o a s I p l a y .

u n l i m i t e d b l a d e w o r k s

その体は

きつと剣で出来ていた」

生徒が周りに気づく

「一体何なんだこれは!？」

あたり一面剣だらけ、足の踏み場も無い状態

「俺の固有結界は一味違っぜ」

「固有結界だと!?!?バカな!?!」

「壊れた幻想

(ブローケンファンタズム)」

「あゝしんどいなコノヤロ」

ため息と愚痴が出る

周りは死屍累々つてやつ？

普通に考えて死ぬけど

そこは神様（候補者）クオリティ

最初から殺すつもりは無い、まあ一生トラウマから立ち直れない位  
ですむ……ハズ

「見つけました!！」

あゝルカ忘れてたわゝ

「一騎打ちでもするんか？」

「もちろんです、私だって

二つ名を持つ者として負けられません！」

意外だ！？甚だしく意外だ！？

てつきりまた18禁方面で

来ると思ってたが……

「それに、勝つたら…私  
を正式な太陽様のモノに／＼／＼／」

「待てやゴルア！？

誰がいつそんな事言った！？」

「私が勝って私を飼って下さい」

「ただの私欲じゃねえか！？」

「行きます！！！！」

「俺の話聞きやがれ！！」

あゝ負けたらめんどいしな、  
でもル力を気絶させるのも  
なあゝ、って八方塞がり！？  
俺の選択肢が無いじゃん！

どうする〜

どうするよ〜

続く！！



若さゆえの過ちって例えば？（後書き）

次回の俺に丸投げだ

ツライ事から逃げるとダメな奴になる。

「はあああ！」「メテオレイン」「

ヒュ~~~~ズババババァン

みんな久しぶり！

元気だった？GW楽しく過ごしたかな？

俺には休みなんて無いよ…

ちょーヤバイよ…死にそう！

マジでアホなのか？

普通に考えて人に隕石落としますか！？明らかに殺すつもりっしょ！！

「ああ〜！！ また避けましたね！」

当たり前でしょ！？  
避けなきゃ死にますから！

「いい加減に、私の愛の一撃を受け入れて下さい！」

「ざけんなあつ！？  
受けいれる「死、なんてのは  
愛とは言わねえ！！！」

「愛こそ全て、愛こそ正義！」

「愛が正義！？アナタは馬鹿ですか！？俺の話聞いてますか！？…  
て言うかルカ！目のハイライトが消えてますよ！？単色ですよ！？  
正気保ててないだろ！？」

「アハハハハハハ！  
私の愛でアナタを包みます！」

ダメだ、完全に狂ってるな…

……マジ怖いよ……ガクブル

……でも

「ルカの愛で包まれたら窒息死しそうだから遠慮します」

「……………えっ？」

ルカがピタッと止まる、なんかワナワナ震えてんのか？

ああ！ちなみに会話中も攻撃されてましたよ！

「……あゝルカさん？……して」ハイ？なんて聞こえない」

「どうして！！私の愛を受け入れてくれないんですか！？……私は、こんなにアナタに尽くそうとしてるのに、……私は見返りに愛してなんていいません！！ただ受け入れてくれたら、私に応えてくれればそれで、それだけでいいのに！アナタが応えてくれるなら私は何でもします、道具でも人形でもペットでも、望むのなら何でもします！」

ピッキーン。

「ざっけんなあっ!!」

さっきから聞いてりや下らん事をいつまでも、応えてほしいなら自分でいやがれ!! 道具だ人形だなんて自分を誤魔化す奴に伝えてやるつもりはねえよ!! このバカネコ娘が!!」

「うっ、誤魔化してなんか!!」

「なら自分でいろ!! 人形やらに逃げんな! ルカ本人が応えてほしいならルカ本人が聞きに来いや!!」

「私自身が…そんな……」

「…自身で聞くのが怖いか?」

「うっ!?!?……」

仕方ねえな、俺に任せな!

「…自分が分からないならなら周りにきけ、今ここに俺がいる! だがしかし、お前がどうしたいか何て俺は知らん! どうするかなんてお前が決める事だ、だから今俺のする事はお前の受け皿に、鞘になつてやる事!!」



……おおふ……まさしく隕石

……と言うよりメラゾーマ!?

視界が炎で埋まる、軽く

トラウマになるくらい迫力あるな、…しかし!

ズドオオオオン

「ハア ハア ハア 勝った?」

「……………よお……………」

「ッ!?!?!?!?!?」

「……どーよ、何か掴めたか？」

「……フフツ　　アハハハハツ

何か、いろいろ分かった気がします」

「そーかい、そりゃ良かった」

「太陽様！私は……解りました」

「言ってみな……」

「つまり、道具や人形に逃げるではなく、私自身が私の意志で太陽様の奴隷として「おいゴルア!？」「どうしました？」

「どうしました？、じゃねえ!？結局変態が開き直っただけじゃねえか!？どんだけ無駄!？回り道してまた戻っただけだろうか!？」

「いえ、違います！

私は自分をもう恥じません！

太陽様にご奉仕させていただくのも、ご褒美を頂くのも、どちらも私です」



しまった〜！！調子こいて説教何かしなきゃよかった！一周回って  
自分の首締めただけじゃねえか、ドチクシヨー！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8758k/>

---

悪魔な男の子と愉快的仲間たち

2010年10月10日04時51分発行